

# 海外ボランティア活動経験がもたらす意識変容に関する調査

○野村智之（早稲田大学大学院人間科学研究科），向後千春（早稲田大学人間科学学術院）

キーワード：異文化適応，ボランティア，意識変容，青年海外協力隊，質的研究

## 背景と目的

青年海外協力隊（以下、協力隊）は、途上国からの要請に基づき、隊員を2年間派遣している。隊員希望者は、なぜ日本より劣悪な環境である途上国での活動に自ら志願するのであろうか。本研究では、半構造化面接を実施し、隊員の特徴、協力隊への参加動機、協力隊経験が及ぼす人生観や考え方などの意識変容を明らかにすることを目的とした。

## 研究

半構造化面接は、中米・アフリカに派遣された帰国隊員10名（男性5名、女性5名）を対象に、非対面方式（Skype・スマートフォン）で行った（インタビュー時間：平均約68分）。収集したデータは、分析テーマを三つ設定して修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）手法を用いて分析した（木下，2011）。その手順は、半構造化面接、分析テーマの設定、概念・カテゴリ生成、結果図作成、ストーリーライン作成、理論化とした。

## 結果

M-GTA 分析により、分析1「参加前の参加動機」で21概念及び10カテゴリ（コア・サブ含む）、分析2「活動中の成長」で28概念及び9カテゴリ（コア・サブ含む）、分析3「帰国後の意識変容」で22概念及び4カテゴリ（コア・サブ含む）が生成された。

## 考察

分析1「参加前の参加動機」については、協力隊事業が掲げる途上国の発展や貢献などの利他的動機は弱く、隊員自身の成長や自己の挑戦の場と考える利己的動機が強いことが示唆された。また、劣悪な環境への活動に自ら志願する隊員の性格や個性からは偏った特徴は見られなかった。

分析2「活動中の成長」については、文化や習慣、言語が異なる環境での活動は決して順調ではない。隊員は、現地の人々に助けられたり支えられたりしながら、失敗と成功を繰り返す、悩み・葛藤することで、新たな価値観や新たな考え方などの気づきや学びを得て成長することが示唆された。このことから、協力隊は、自己のスキルを活かす場であり、かつ、自己を成長させる場であるといえる。

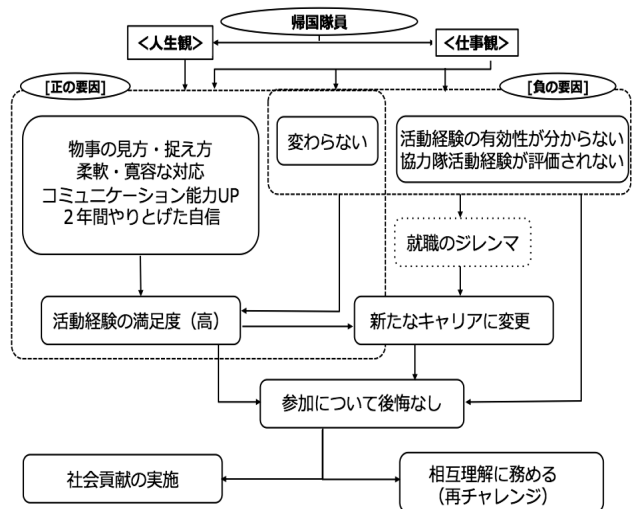


図1 帰国後の意識変容に関する結果図

分析3「帰国後の意識変容」については、隊員は協力隊に参加したことで人生観や仕事観に対する意識の変化を感じていた。さらに、協力隊に再度チャレンジすることを想定した質問では、参加動機が、自己の成長といった利己的動機から、現地への社会貢献・発展への寄与といった利他的動機へと変化していた（図1）。

国際協力経験を得ても、帰国後に隊員は国際協力の道に進むとは限らない。さらに、日本社会に評価されない協力隊経験は就職の足枷となる。それにも関わらず隊員は協力隊経験に満足し、後悔していなかった。なぜなら、隊員が、日本の常識が通用しない異文化での活動経験で、語学やコミュニケーション能力、柔軟性を身につけたり、また、異文化理解ができるようになったり、自己の成長を実感していたからであった。

## 結論

本研究の結果から、協力隊の参加動機は異文化環境での活動経験により、利己的動機から利他的動機に変化していることが示唆された。また、協力隊は、自己のスキルを活かす場であるとともに、自己を成長させる場であると示唆された。

## 引用文献

木下康仁(2011).M-GTA グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 弘文堂.